

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.75

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

支部長就任のご挨拶

田村道美

竹中龍範先生には平成17年度より24年度までの計8年間の長きに亘って日本英学史学会中国・四国支部の支部長を務めていただきました。長い間、中国・四国支部の発展のためにご尽力くださったことに心より感謝いたすとともに、「本当にお疲れ様でした」と労いの言葉を申し述べたいと思います。

ところで、わたくしも竹中先生が支部長に就任された平成17年度に副支部長となりました。竹中先生から「急に何かあったときに、すぐに相談できる人間が副支部長としてそばに一人ほしい」との要望があり、同じ大学に勤務するわたくしが僭越ながら副支部長を勤めることとなりました。例会の閉会式で挨拶をするだけの仕事しかできませんでしたが、わたくしも8年間副支部長を務めてまいりましたので、そろそろお役御免をさせていただくつもりでした。

しかし、今回竹中先生が支部長を退かれることになり、その後任を引き受けてもらえないかとの打診がありました。浅学非才のわたくしには支部長の重責は務まらないこと、また、同じ大学の教員が続けて8年間以上も支部長を務めるのは好ましくないのではないかとの疑問を呈し固辞したのですが、年齢や支部長は日本英学史学会の会員でなければならないとの規定等を勘案するとわたくししかいないとのことですので、やむなくお引き受けすることになった次第です。

今回の次期支部長決定をめぐる問題によって、日本英学史学会各支部の抱える大きな問題点「会員がなかなか増えないこと、支部会員が必ずしも本部会員にはなっていないこと」が改めて浮き彫りになりました。この組織上の問題点はこれまでも何度も話題になり、各会員皆様にもさまざまな形でご努力をいただいております。したがって、一朝一夕に解決できる問題ではありませんが、わたくしの任期の間に多少とも成果を挙げられるよう努力をしていきたいと思っておりますので、皆様の一層のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(日本英学史学会中国・四国支部長)

平成25年度 総会・第1回 (通算68回) 研究例会 報告



安田女子大学 9522 教室にて (2013. 5. 25.)

日本英学史学会中国・四国支部 平成25年度総会、及び第1回 (通算第68回) 研究例会は以下の通り開催され、盛会裏に終了いたしました (参加者16名)。会場をお世話くださいました松岡博信副支部長をはじめ、ご参加くださいました皆様に、心より厚くお礼申し上げます。

プログラム

日時： 2013年5月25日 (土) 12:30 受付開始

会場： 安田女子大学 9号館5階 9522 教室 〒731-0153 広島県広島市安佐南区安東 6-13-1

支部総会 (13:20~13:50)

議長選出, 前年度活動報告, 会計報告, 会計監査報告, 平成25~26年度役員選出, 新年度活動計画, 他

開会行事 (14:00~14:10) 挨拶 副支部長 竹中龍範 (香川大学)

研究発表① (14:10~15:20)

「大正10年の英語授業視察 (福岡・佐賀・長崎) について : 防長教育会委託学事視察復命書より」
隈 慶 秀 (福岡県立明善高等学校)

研究発表② (15:30~16:40)

「京城中学校の英語教育について : 中学修猷館との関わりを中心に」
安 部 規 子 (有明工業高等専門学校)

閉会行事 (16:45~17:00) 挨拶 副支部長 松岡博信 (安田女子大学)
写真撮影

懇親会 (18:00~20:00) とり楽 毘沙門店にて

研究発表①

「大正10年の英語授業視察（福岡・佐賀・長崎）について：防長教育会委託学事視察復命書より」

隈 慶秀（福岡県立明善高等学校）



【概要】「防長教育会委託学事視察復命書」は、山口県防長教育会より委託をうけた近藤春和（山口県立山口中学校教諭）が大正10年11月に福岡県立中学修猷館、福岡県立福岡中学校、佐賀県立佐賀中学校、長崎県立長崎中学校4校の英語授業を視察した復命書である。本発表ではは中学4年・5年の（一）英譯読、（二）文法作文の詳細な英語授業観察の具体的な内容ならびに外国人教師の授業と当時の習熟度別授業について述べた。フロアから出されたご助言をもとに今後の課題をまとめると、英語授業発達史の観点からみた復命書の意義、大正中後期の英語教育事情や、この復命書が山口の防長教育会にどのように還元されたか調査し、考察する必要がある。

【参加者の感想】

◆故松村幹男氏の研究を継いで、大正期の英語教育史を詳細に追求しようとの姿勢が窺えて、好感がもてる。発表内容も、大変おもしろく、授業を視察した報告書からは、当時の中学生（すべてではないが）のレベルの高さにビックリさせられる。またベテラン教師による授業の密度の濃さが伝わってくる。

<K.F>

◆「防長教育会委託学事視察復命書」という新資料をていねいに解説して下さりありがとうございます。私は中学修猷館を調査しておりますので、今回大正時代の英語科の中心的存在だった小川教諭の授業の進め方が具体的にわかり大変参考になりました。

<安部規子>

◆大正10年の福岡・佐賀・長崎の紹介された学校が進路の位置付けでウェイトがあった感じがする。

<古川正昭>

◆学事視察復命書は、文部省関係のものも或る時期までは公開されることが少なかったために情報が得にくく、まして府県レベルのものや、今回御発表頂いた地方教育会によるものはなかなか手に入りませんので、英語授業の歴史を調べる上で大変参考になります。当時の授業についての記述等と比較して、この視察の対象となった英語授業の特徴を分析して下さい。<Dragon>

◆当時の復命書を丹念に分析して考察されており、とても興味深く感じました。当時の訳読法が具体的に分かりました。今日では訳毒と評判の悪い指導法ですが、私は外国語を理解するうえで生徒がすでに習得している母国語を活用するのは指導法の一つとして有効ではないかと思っています。パーマーも日本語を使用することを排除してはいません。また、外国語教育の目的は単なるコミュニケーションだけではないはずです。英語科教育は英会話学校での教育とは違います。英会話！英会話！と叫ぶ諸氏には、『英語教育と「訳」の効用』ガイ・クック／著、齋藤兆史・北和丈／訳 2012 研究社 を読んでいただきたいと思います。<JH4DGW>

◆授業視察に係る「復命書」に基づく研究ということで、大変興味深く拝聴しました。防長教育会は毛利家の出資に負うところ大のようですので、現代の市町村教育委員会とは全く別の組織と考えた方がよいのでしょうか。防長教育会の実態について更に知りたくまりました。また、本研究で取り上げられた復命書が、その後の教育改革にどのように反映されたのか大変関心があります。是非、継続した研究をお願いいたします。

余談ですが、ご提示くださった『福中二十年史』の中で言及されている「英語教育の実際」では、「解釋偏重の弊を打破し（中略）英語科凡での方面の力となるべく均等に伸ばすこと・・・」「文法は（中略）分類定義分析命名は出来得る限り避け歸納的に既知材料を整頓補正する事・・・」など、現在の学習指導要領にもつながる留意点が挙げられており、80年前と現代の課題の普遍性に苦笑しました。加えて、「運動会」が11月に開催されていたこともおもしろい発見でした。<堂鼻康晴>

◆山口中学校（旧制）の近藤春和教諭が学事視察に出かけられた大正10年といえば、旧制高校への入試が熾烈を極め、ナンバースクールに加えて地名スクールが次々に増設されていた時期である。近藤教諭の精力的な（食欲な？）取材は山口中学校の英語科スタッフにとって心強い「敵情レポート」(?)になったことでしょう。<もみじまんじゅう>

◆パーマーが来日する前年、大正10年の授業記録というのはとても価値のあるものだと思う。このような当時の「訳読式」の授業にパーマーの理論はどのような影響を与えたのか。歴史の中では随分と批判されている「訳読式」であるが、日本人には必要な教授法の一つではなかろうか。(「英語の授業はAll Englishで」には大反対!) また、この時代の習熟度別がどのように展開されていたのかもとても興味深い。<Rainbow>

◆隈先生の発表を聞いて、松村先生の遺志を忠実に受け継がれておられるなど推察し、感銘を受けました。英語授業発達史の研究をこのまま深めて体系化して欲しいと思いました。

◆当時の授業を知る上で貴重な御発表をありがとうございました。大正期の実践と現代の指導法とを対比し、残ったものと消えたもの、さらにその理由が明らかにされると面白いのではないかと思います。資料の発掘と分析を今後も楽しみにしています。

<Horse>

研究発表②

「京城中学校の英語教育について :

中学修猷館との関わりを中心に」

安部 規子 (有明工業高等専門学校)



【概要】今回、日本統治下の朝鮮の京城中学校について、これまでの調査結果に基づいて発表させていただきました。これまで私が研究してきた修猷館から3名の館長を始めとして多くの教員が赴任していることから興味を持ったのですが、その英語教育についてはまだ分かっていることの方が少ない状態です。これから教育課程や教材について調査を続けていくと共に、当日フロアの先生方からご指摘いただいた通り、当時の日本の外地(朝鮮、台湾、満州等)における教育政策や日本の教育史についてもよく理解する必要があるとわかりました。ご指導いただきありがとうございました。

【参加者の感想】

◆旧植民地の学校については制度上の異なり等で調査が難しいかと思いますが、ぜひ調査を続けていただいて京城中学の英語教育の一端でも明らかにしていただきたく思います。<Dragon>

◆今まであまり意識していなかった京城中の英語教育を知ることができました。それぞれの英語教師が京城中といかにかかわってきたのがよくわかりました。当時の個性豊かな先生方のことがわかり、大いに刺激をうけました。ありがとうございました。

<中舛俊宏>

◆日本で6番目の帝国大学が朝鮮に設立されていたのは意外な事実である。修猷館に縁のある優秀な教師たちがその指導にあたり、「東京の学習院以上に学習院的存在」と言われていたように多くの優秀な卒業生を送り出している。が、この学校の運命も歴史が大きく影響していることを考えると複雑である。ひとつの点からさまざまな線が出ている、繋がりとということを再認識しました。<Rainbow>

◆福岡県の修猷館から京城中学校に多くの優秀な教員が行った経緯など、綿密な調査に敬服した。館長一人一人についてもよく経歴を調べ、その人脈、学校での生徒との交流、評判、人物像などもわかって、有意義な発表であった。また、資料発掘に至るエピソードもおもしろかった。京城中学校の英語教育の中味そのものについての発表は今後を待ちたい。

<K.F>

◆昔、京城中学校に英語教諭として勤務したことのある人物(故人)が職場の元同僚であったこともあり、特別関心をもってご発表を拝聴いたしました。京城中学校は修猷館と人事で深い繋がりがあったことを初めて知りました。また、教科書の使用についてかなり神経過敏になっていたことも新発見でした。今後、教材やカリキュラムについての研究が深まることを期待しています。<もみじまんじゅう>

◆京城中学校の資料発掘についての根気ある努力のエピソードを興味深く聞かせていただきました。

<Kshu>

◆修猷館の教員人材がたいへんすばらしく、初期に英語中心の教育をしていたことに関心した。

<古川正昭>

◆安部先生の発表は何度か聞きましたが、今回は違った切り口で大変、面白かったです。安部先生も言っておられましたが、京城中学の初代校長に限本有尚がなぜ行ったのか興味があります。それと当時の人事を校長がそれほどまでに出来たのか不思議に思いました。朝鮮総督府に強いコネがあったのでしょうか。金子堅太郎が関係しているのでしょうか。次回の切り口も楽しみです。

◆日本統治下の朝鮮半島(韓国)における教育の実態に係る研究ということで、大変興味深く拝聴しました。人事面において広島高師出身者も多かったとの事実を伺い、当時の時代背景に思いを巡らせました。(質疑の場面でも話題になりましたが)ぜひ、「英語教育」の実態についても継続した研究をお願いし

たいと思います。〈堂鼻康晴〉

◆日本の統治時代の京城中学の教員を中心としてのご発表で、内地、特に福岡の修猷館との関連が深かったことを資料を通して精査されて、地理的、学閥的關係が影響していたことを示唆していただきました。質問でも述べたように、タイトルにもある「英語教育」の実態がもう少しつかめればよかったですと感じました。〈JH4DGW〉

◆生徒の回想文によって描き出される教師像が印象的でした(特に安藤貫一)。日本国内の他の学校でも教えた教師たちが、京城での教育経験によってどう変わったかが分かるとさらに面白いかと思えます。今後も解明を続けてくださるようお願いいたします。〈Horse〉

【研究例会全体について】

◆研究発表2件が九州在住会員によるということで支部活動の広がりを感じつつも、中国・四国地区在住会員の奮励努力を期待します。〈Dragon〉

◆とても楽しい、有意義な時間を過ごすことができました。久しぶりに諸先輩方にお会いし、お元気にご活躍されている姿から「自分もがんばらなくては!」との思いでいっぱいになりました。ご出席の先生方から勇気と英気を頂いた珠玉の1日でした。

〈堂鼻康晴〉

◆これまでの研究例会同様、何もかもが事務局、幹事さんたちの見事なハンドリングによりとても爽やかな学びの場となりました。また、安田女子大学の9号館の教室は静かで良い環境の研究会場でした。

〈もみじまんじゅう〉

◆ちょうど今、高校英語での“授業は英語を使って”とか、小学校での“英語必修化”が話題となっている時期でもあり、まことにタイミングのよい発表であった。発表者にお礼申し上げます。〈K.F〉

◆いつもながら研究のヒントをいただきありがとうございます。〈Kshu〉

◆発表者の先生の日頃の熱心なご研究の姿勢が感じられ、自分にもよい刺激になりました。すばらしい環境の会場でしたが、欲を言えば、松岡先生も言われていたように、校門と建物の入り口に会場案内の掲示があればありがたかったと思えます。

また、大学から懇親会場へ行くとき、三浦先生がご自身の車で付近の案内もしてくださり、特に垣田先生の住んでおられたところも拝見することができました。

お世話いただいた馬本先生をはじめ事務局の先生、会場設定・懇親会とお世話くださった松岡先生、本当にありがとうございます。〈JH4DGW〉

◆明治～大正の英語教育は内容的に充実していたことを知った。〈古川正昭〉

◆素晴らしい会場で充実した例会となりました。松岡副支部長をはじめ、安田女子大学の関係者の方々にお礼申し上げます。全員参加の懇親会も盛り上がり、支部の研究活動の勢いを感じさせる会であったと思えます。ありがとうございました。〈Horse〉

中国・四国支部ニュース

◆平成25年度第1回理事会 5月25日(土)の支部総会に先立ち、午前11時より理事会を開催しました(出席者5名)。前年度活動報告、会計報告・会計監査報告、平成25～26年度役員、今年度の活動計画について審議を行いました。

◆平成25年度支部総会 5月25日(土)午後1時20分より、議長に上西幸治会員を選出し、今年度の支部総会を行いました。

①平成24年度活動報告

事務局より昨年度の活動について報告。内容は、(1)支部総会、(2)第1回研究例会(広島)、(3)第2回研究例会(今治)、(4)『英學史論叢』第15号の発行、(5)『ニューズレター』No.70～No.73の発行、(6)理事会の開催(第1回、第2回)、の6項目です。詳細は『英學史論叢』第16号(pp.49-52)をご覧ください。

②平成24年度会計報告・会計監査報告

次ページに両報告を掲載しています。

③平成25～26年度役員

支部長より次の通り平成25～26年度役員について提案があり、了承されました。

支部長：田村 道美
 副支部長：上杉 進・竹中 龍範・松岡 博信
 顧問(相談役)：小篠 敏明・定宗 一宏・寺田 芳徳
 顧問：五十嵐 二郎・小泉 凡
 理事：馬本 勉・河口 昭・田中 正道・
 築道 和明・鉄森 令子・能登原 昭夫・
 深澤 清治・風呂 鞏・保坂 芳男
 事務局長：馬本 勉
 幹事：隈 慶秀・中舛 俊宏・能登原 祥之・
 藤本 文昭
 会計監査：堂鼻 康晴・平本 哲嗣

④今年度の活動計画

- 1) 研究例会
 - ・第1回 平成25年5月25日(土)
(予定通り終了)
広島市・安田女子大学にて
例会当日、理事会および支部総会を開催
 - ・第2回 平成24年12月14日(土)
山口市歴史民俗資料館にて
例会当日、理事会を開催予定
- 2) 支部研究紀要
『英学史論叢』第16号(予定通り発行)
- 3) ニューズレター
No.74(平成25年5月、発行済み)
No.75(本号)
No.76～77(発行予定)

平成24年度 日本英学史学会 中国・四国支部 会計報告

収入の部		支出の部	
繰越金	188,774	通信費	22,740
年会費	129,000	紀要印刷費	68,565
紀要掲載料	6,000	ニューズレター印刷費	8,495
紀要売上	3,000	事務費	1,778
補助金	17,000	会議費	2,730
ゆうちょ銀行利子	31	事務用品	4,378
収入合計	343,805	支出合計	108,686
		次年度繰越金	235,119

以上、ご報告申し上げます。

2013年5月23日

事務局会計 馬本 勉

平成24年度 日本英学史学会 中国・四国支部 会計監査報告

各位

本学会の会計を、収入並びに支出に関して、それぞれ関係書類及び領収書等により監査いたしました。その結果、会計報告の通り、全て適正、正確に会計処理ができていることを確認いたしました。

以上報告いたします。

2013年5月24日

会計監査 鉄森 令子 ㊞

会計監査 平本 哲嗣 ㊞

平成25年度第2回(通算69回)研究例会(山口研究例会)のご案内

本年度第2回(通算第69回)研究例会を、来る12月14日(土)、山口市歴史民俗資料館(山口県山口市)にて開催する運びとなりました。開催にあたり、上杉進先生ならびに金田道和先生には格別のご配慮を賜りました。心より篤くお礼申し上げます。

今回の例会では、元毛利博物館館長 小山良昌先生のご講演、資料展観、そして副支部長 上杉進先生の研究発表が予定されております。会員の皆様にはぜひ山口の地にご参集いただきますよう、ご案内申し上げます。

研究例会のあとには、忘年懇親会を企画いたしております。こちらの方へも多くの皆様のご参加をお待ちしております。

日時：平成25年12月14日(土) 12:30 受付開始
会場：山口市歴史民俗資料館 学習室
〒753-0073 山口市春日町5-1
電話：083-924-7001



(山口県ホームページより)

プログラム：

開会行事 (13:00-13:05)

講演 (13:05-14:35)

「杉孫七郎の渡欧と長州ファイブ」(仮題)

小山良昌(山口県地方史学会長・元毛利博物館館長)

資料展観 (14:35-15:20) 大村益次郎関係

研究発表 (15:20-16:20)

「松下村塾最後の塾生 正木退蔵 —東京職工学校(現東京工業大学)、ホノルル総領事— 松陰は何を教えたのか」
上杉 進(元高水高等学校)

閉会行事 (16:20-16:30)

忘年懇親会 (17:30-19:30) 心和食まほら(山口市湯田温泉 3-3-15, Tel083-934-7321) (予算 5,000 円程度)

山口研究例会の参加申込について

※ 例会・懇親会のご出欠、ならびに宿泊予約ご希望の有無をお知らせください。同封の参加申込用紙の内容につきまして、10月31日(木)までに、メール、ファックス、郵送のいずれかでご回答くださいますよう、お願いいたします。

※ 宿泊希望の方へお願い： 例会翌日に山口市で全国規模の競技大会が開催されるため、湯田温泉の宿泊予約が困難となっております。事務局では、複数の施設に数部屋を確保しております(1泊5~7千円程度)。ご希望の方はお知らせください。(禁煙ルームの指定は難しいこと、場合によっては相部屋をお願いすることもございますので、あらかじめご了承ください。)

事務局連絡先 メールアドレス： eigaku@tom.edisc.jp

F A X 番号： (0824) 74-1725

郵 送 先： 〒727-0023 広島県 庄原市七塚町 562 県立広島大学 馬本研究室内

日本英学史学会 中国・四国支部事務局

英学史学会全国ニュース

>> 「日本英学史学会報」No.131 (9月1日付)

《史に聴けば》(28)

英語雑誌名編集者・吉田幾次郎の教員経歴
(庭野吉弘)

《英学史散策》

蘭学の泉碑と、慶應義塾発祥の地(堀 孝彦)
齋藤修一郎が明治19～21年に読んだ英書の発見
(川瀬健一)

「国民栄誉賞」に思うことのいくつか(堀江義隆)
第二版刊行の顛末(奥村紀子)

《支部活動報告》

※支部活動報告として、中国・四国支部平成25年度総
会ならびに第1回(通算68回)研究例会報告、『英学史
論叢』第16号の目次などが掲載されています。

>> 『英学史研究』第46号

2013年10月1日発行。掲載論考は次の通り。

[論文]

「本田増次郎のユーモア観:『英學新報』『英文新誌』
『英語青年』の寄稿文から」(長谷川勝政)
「イギリスにおける平田禿木(2)」(小林信行)
「『英文學叢書』と岡倉由三郎:日本の英文学受容に
ついて」(岩上はる子)
「わが国におけるキーツ受容:キーツ百年祭と豊田
實」(齋藤晴恵)
「荘田泰蔵のグラスゴウ大学留学」(加藤詔士)

ほか

>> 第50回記念全国大会

2013年9月28日(土)～29日(日)、慶應義塾
大学三田キャンパスにて開催されました。初日は総
会、資料展覧(慶應義塾福沢研究センター)、特別講
演「英学の終焉と学生の英語力の低下:それでも英
学の終焉は進歩だったか」(太田雄三マッギル大学名
誉教授)、懇親会が行われた。第2日は22本の研究
発表が行われた。中国・四国支部会員の発表は次の
通り。

- ・馬本 勉氏「英学独習書に見る英語学習の諸相」
- ・斎藤浩一氏(小林敏宏氏との共同発表)
「国民国家の英学とその変容過程に関する研究」

※日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部
とは別に手続きが必要です。詳細は学会ウェブサイトをご覧
になるか、支部事務局までお問い合わせください。

英学史情報ひろば

- ◇寺田芳徳(2013)『海軍兵学校英学文献資料の研究:広島大学転用図書に基づく、目録の作成、英学と福音・言語教育と平和への望み』溪水社。
- ◇「ロマン・ロランの手紙(庄原市倉田百三文学館)失意が生む創造力 共鳴:誠実さ描いた戯曲を激賞」コレクション再発見⑩『中國新聞』2013年6月7日朝刊文化面(※野村勝美先生の解説が紹介されています。)
- ◇小泉 凡(2013)「ニューオリンズでの記念事業“The Open Mind of Lafcadio Hearn in New Orleans”を終えて」『へるん』50, pp.64-68.
- ◇風呂 鞏(2013)「丸山学の恩師カリンズ先生」『へるん』50, pp.75-78.
- ◇第153～157回「広島ラフカディオ・ハーンの会」ニュース(2013年5月～9月)[風呂鞏先生より]
- ◇江利川春雄(2013)「英語教育日誌[2012年4月～2013年3月]」『英語教育』62,(8), 70-76.

催し物案内

- ◇2013年9月14日(土)～11月4日(月)
生誕150年記念展覧会 郷土の偉人 武信由太郎
鳥取市あおや郷土館
鳥取市青谷町青谷2990-4
☎0857-85-2351
<http://www.tbz.or.jp/kyoudokan/>
- ◇2013年11月17日(日)
グリフィスと福井 増補改訂版出版記念講演会
山下英一氏「グリフィスが見た福井の自然と宗教」
藏原三雪氏「グリフィスの理化学教養と授業」
福井県立図書館多目的ホール
福井市下馬町51-11
☎0776-33-8860
<http://www.library.pref.fukui.jp/>

中国・四国支部事務局より

>> 年会費納入のお礼とお願い

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費(一般3,000円、学生2,000円)をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。これからお振込みの方は下記口座までよろしくお願ひいたします。

(口座番号) 01360-9-43877
(加入者名称) 日本英学史学会 中国・四国支部

>> 紀要の配布・販売について

研究紀要『英學史論叢』は、会員の方へ一部ずつ、研究論考・研究ノート執筆者には所定の部数をお渡ししています。最新号の追加やバックナンバーをご希望の方には、一部1,000円（非会員1,500円）にて販売いたします（郵送料込）。バックナンバー収載の研究論考等のタイトルは、ウェブサイトにてご確認ください。詳細は事務局までお問い合わせください。

>> 第2回研究例会（山口例会）について

今年度第2回（通算69回）研究例会は、2013年12月14日（土）、山口市歴史民俗資料館（山口県山口市）を会場に開催されます。本ニューズレター7ページをご覧の上、10月末日までにお申し込みください。

>> 『英學史論叢』第17号原稿募集

日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第17号（2014年5月発行予定）の原稿を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、以下に掲載の「執筆要領」お

よび「標準書式」に従ってください。

・研究論考・研究ノートを投稿予定の方は、事前に「投稿申込」をお願いします。2014年1月31日までに事務局へ、メールまたはファックスにてお申し込みください。

メール： eigaku@tom.edisc.jp

ファックス： 0824-74-1725

・原稿提出の締切は、**2014年2月20日**（消印有効）です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノートは、正副計3部をお送りください。英学史随想、書評等は1部お送りください。

>> お詫びと訂正

『英學史論叢』第16号、巻頭言中に変換ミスがありました。お詫びを申し上げますとともに下記のとおりご訂正をお願い申し上げます。

<p.1, 巻頭言, 第3段落5行目>

誤 ⇒ 正

『週間現代』 ⇒ 『週刊現代』

>> 訃報

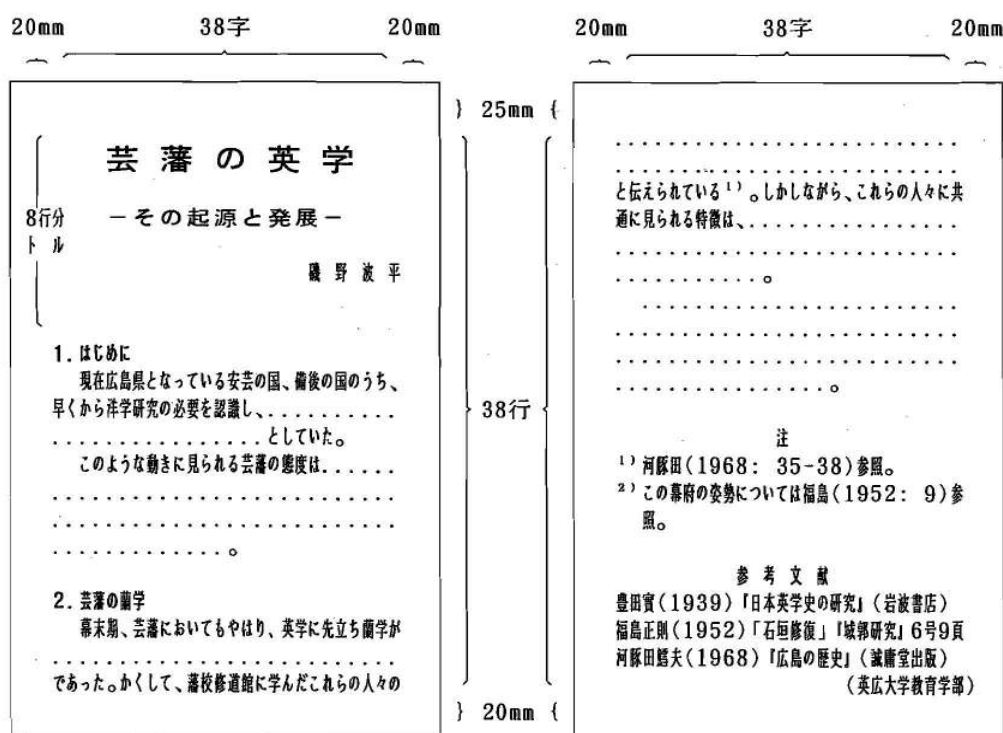
寺田芳徳先生 8月22日ご逝去。事務局長、支部長を歴任され、顧問（相談役）をお務めくださいました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

『英學史論叢』執筆要領

- ・『英學史論叢』に載録するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
- ・研究論考・研究ノート、その他のものとも、原則として提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれも標準書式に従った完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいったものは受理しないことがある。
- ・研究論考・研究ノートは日本英学史学会中国・四国支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副3通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、編集委員会は必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。
- ・研究論考・研究ノートは参考文献・資料・図版等を含め、10ページ以内とする。
- ・掲載決定後の最終原稿はプリントアウトしたものと合わせ、電子媒体によるデジタルデータを提出することを原則とする。
- ・研究論考・研究ノートの掲載料は1編につき3,000円とする。ページ数を超過した場合は、1ページにつき1,000円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については、規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。
- ・その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部の執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として2ページ以内とする。

『英学史論叢』標準書式

- ・用紙はB5判白紙を用い、上部に25mm、下部および左右に20mm、それぞれ余白をとる。
- ・本文は、10ポイントないし10.5ポイント文字を使用し、1行あたり38文字、1ページ38行の書式によって作成する。
- ・本文第1ページに8行分をとって論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは4倍角文字ないし18~20ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。
- ・本文中の見出しについては1行アキとし、番号を付して太字、あるいはゴシック体とするか、下線を施して見やすくする。
- ・注は、脚注、尾注のいずれも可とするが、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
- ・参考文献、引用文献は論文末に一括して示す。
- ・英字・数字はすべて半角文字とする。



広島英学史の周辺(41) 寺田芳徳先生には、比治山女子短期大学赴任当初より大変お世話になりました。LL教室の機器や教材をどう活用するか、先生の理念と方法論を、いつも温かくご指導くださいました。同時に、英学史という学問の世界へも誘ってくださいました。四年制大学への改組で激務の日々でありながら、常に笑顔たたえた先生は、まさに「ジェントルマン」でいらっしゃいました。▼先生がご定年を迎えられて間もなく、私は庄原の大学へ転出しましたが、そこは先生がライフワークとされた英学校の地。不思議なご縁を感じつつ、庄原の英学について引き続き多くのご指導を頂きました。▼先生は今年4月、庄原英学校とともにライフワークとされた「海軍兵学校文庫」に関する研究を出版されたばかりでした。A4判 377ページの大著には、寺田先生の英学

のエッセンスが詰まっています。▼寺田先生、どうか安らかに眠りください。本当にありがとうございました。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No. 75
2013年10月8日発行
発行 日本英学史学会中国・四国支部 (代表 田村道美)
事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562
県立広島大学 馬本研究室内
電話&FAX: (0824) 74 - 1725 (直通)
e-mail: eigaku@tom.edisc.jp
ホームページ http://tom.edisc.jp/eigaku/
郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.75